

校区コミュニティと地域教育実践

— 喜界島荒木小学校と校区住民の教育実践を中心に —

神田 嘉延〔鹿児島大学教育学部（教育学）〕

The community of the elementary school and education practice

— Around Kikaishima Araki elementary school and the inhabitant's education practice —

KANNDA Yoshinobu

キーワード：総合単元学習、総合的学習の時間、地域教材、住民の学校参加、校区コミュニティ

はじめに

第1章 喜界町の地域教育実践の特徴

第1節 喜界町の地域教育実践の施策

第2節 「3・4年の社会科のわたしたちの喜界町」の特徴ある副読本

第3節 喜界町の各小学校の特色ある教育実践の特徴

第2章 喜界町荒木小学校の地域教育実践の特徴

第1節 荒木地域の特徴

第2節 地域教材開発と地域再発見のための住民ぐるみのマップづくり

第3節 荒木小学校における総合単元学習の実践

はじめに

本論は、喜界町における小学校の地域に根ざした教育実践、とくに総合単元学習と、校区コミュニティの住民による学校教育活動の参加を分析するものである。喜界町は3つの中学校と一つの高校による地域連携型の中高一貫教育を平成12年から県教育委員会の研究指定を受けて、実践をはじめている。この地域連携型の中高一貫教育を喜界学という地域教材に焦点をあてて教育実践しているのが特徴である。地域連携型の中心軸にしたのが喜界学である。これは、総合的学習、進路指導、各教科の地域教材などによって実践している。すでに、喜界町での地域連携型と地域の自立発展についての分析は、鹿児島大学生涯学習教育研究センターの年報論文第3号において、筆者は

まとめている。⁽¹⁾

喜界学は、地域連携型の中高一貫教育ばかりではなく、小学校での特色ある教育実践として、積極的に展開しているのが特徴である。さらに、小学校での地域教育実践において、校区の住民が参加しているのも大きな特徴である。この校区の住民が特色ある学校教育実践に積極的に参加していくのは、子育てにおける地域の一致したまとまりであり、子育てが校区住民がまとまっていくうえで、地域アイデンティティ形成の大きな要素をしているのである。過疎化していく厳しい状況のなかで、子育ては、その校区にとっての未来を表すのである。子どもが将来的に地域にUターンするか、または、高校卒業して地域に残ることがなければ、校区は人口の面から崩壊していくのである。

各小学校における児童数は、11名阿伝小、12名坂嶺小、13名滝川小、14名小野津小と、4つの小学校が10名代前半の児童数である。38名早町小、43名荒木小、56名志戸桶小、59名上嘉鉄小と、複式学級のクラスやその可能性をもっている学校が、4つのである。役場のある中心市街地の湾小学校296名（平成18年5月現在）である。4つの小規模の小学校における校区の戸数は、小野津小220戸、坂嶺小246戸となっており、43名の児童数をかかえる荒木小272戸と、同じ農村における小学校でも戸数と児童数の関係は対応していない。高齢化の進行状況が地域において、大きな違いがあるのである。本稿で荒木小学校の校区を注目したのは、児童数が大きく減少しない状況を作り出している状況を明らかにするためであり、小学

生、中学生、高校生などが地域行事や地域の伝統文化活動をとおして縦のつながりによる一体の活動に注目したからである。このような状況のなかで、地域の住民が学校教育活動に積極的に協力し、学校教育でも地域教材を積極的に展開して、地域の人材を活用しているのである。

荒木小学校では、総合的学習の時間を総合単元学習のなかで位置づけて、クロスカリキュラムを展開している。クロスカリキュラムは、教科からクロスカリキュラムにしていくということではなく、総合的学習の時間の体験学習を課題解決能力の形成ということから教科に結びつけていく方法をとっている。

山口大学教育学部附属山口中学校では、生きる方向を求めて学ぶカリキュラム開発として、クロスカリキュラムで行う総合単元学習の実践を展開している。地域学習、国際理解学習、環境学習と、3つの単元を総合単元学習として実践している。授業の構想は、教科・道徳・特別活動の領域で実践している。

総合単元学習の目標は、自分探しと生きて働く知恵であるとしている。教育目標の大きな柱に自分探しということから地域学習、国際理解学習、環境学習の3つの総合単元学習を実践している。教師による情報提供、個人課題設定、個人課題紹介、班編制、班の課題設定ということで、個人の課題設定を大切にしながら班への課題にもっていく教育方法をとっている。

そして、班の課題設定に基づいて、調査活動、調査発表、まとめ冊子ということに進んでいく。総合単元学習への各教科のかかわりとして、地域学習の場合、国語は、自分たちの誠意や熱意を手紙という形式で伝える授業を行っている。

この場合に、現地を訪問して調査活動を行うことで、訪問先に依頼状を書く授業を展開している。社会科では、地域をとらえていく視点を授業やフィールドワークの仕方で行っている。

山口大学教育学部附属山口中学校の実践は、自分自身の興味や関心を自分で発見していくという自分探しのカリキュラム開発という方法をとっている。カリキュラムのとらえ方として、教科・道徳・特別活動など教育課程にあたる顕在的なカリ

キュラムと、日々の生徒会活動や学級会活動などの形式と、みえにくい潜在的カリキュラムの2つがあることを認識して、教育活動をとりくんでいる。

この山口大学附属中学校の総合単元学習の実践は、総合的学習の時間の導入のなかで体験学習重視の実践が進み、地域に根づいた教育実践として、離島・僻地において、生きていくための学力をつけていくうえで、学ぶところがある。⁽²⁾

喜界町の実践の中心は、生きていくための学力として喜界学を設定して、喜界町に育った子ども達が、喜界町の誇りを、科学的知識を得ながら獲得していくということであり、地域教材を積極的に利用して子ども達が生きていくための諸能力を獲得できるような総合的な学習の時間の授業実践である。それを教科や進路指導と結びつけて総合単元学習へのとりくみを期待されているのである。

今谷順重は、横断的・総合的な学習とクロスカリキュラムを生きていくための生活知として全人的学力の統一的な形成が重要な学校教育の改革課題として、次のように問題提起している。「現在の学校知が、子どもたちの生きる力・生きていく働く生活の知恵としての生活知になかなかうまくつながっていかない一つの理由は、親学問を背景として縦にばらばらに配列された教科分立主義教育では、自分がどう生きていけばいいかについて、自分の頭で自ら主体的に考え判断し行動するための糧になるような本物の知性が、なかなかうまく育ってこないという点にあるのではないだろうか、従来のような細分化された教科の縦割り主義からの脱却が、これからのカリキュラム改革や授業改革の大きな課題になってくるのである」。⁽³⁾

学校知を子どもの生きる力のための学力にしていくうえで、クロスカリキュラムや総合単元学習の課題をどう具体的にしていくかという研究のメニューがあるのである。

そこには、総合的な学習の時間を発展的に各教科と関連させていくクロスカリキュラムの探求があり、総合的な学習の時間の課題設定が総合単元なものに設定していく工夫が必要なのである。食農教育や郷土教育などの課題は、地域教材として

の体験的学習も可能であり、総合単元としての課題になるテーマでもある。

第1章 喜界町の地域教育実践の特徴

第1節 喜界町の地域教育実践の施策

喜界町の教育における基本的な理念は、町づくりは人づくりからということで、ふるさとと自らに誇りをもつ教育実践の施策を展開していることである。地域連携型の中高一貫教育の軸に喜界学を設定したが、それはふるさに誇りをもたせるためである。そして、教育の成果は、子どもの姿でみていこうということで、生きがいや自己実現を育む生涯学習施策を展開しているのである。また、喜界町の人びとに学びの風をふかせようと、公民館講座や定期的な講演会などの充実はもちろんのことであるが、講座計画の年間行事に入っていないくても、大学の教師や島外からの文化人が喜界島に訪れる情報を得ると、学びの場を即座に設けていく努力をしている。

喜界町の教育の重点施策では、町長を推進本部長として、生涯学習推進会議を設置している。副本部長に教育長と助役で委員38名から構成されている。役場からは、3役をはじめ各課長7名、教育委員会・社会教育関係団体・公民館・図書館から14名、学校関係者4名、会社関係・経済団体6名、区長会会長、警察所、議会議長、議会文教常任委員長などからなっている。

首長部局は生涯学習推進のための関係団体との連携強化をあげている。生涯学習を推進していくためには、地域でのリーダー育成の推進施策をだしている。

生涯学習推進会議の大切な行事として、島興し祭りと喜界町生涯学習推進大会を実施している。生涯学習推進大会では、活気に満ちた文化と産業の町づくりということで、喜界町の各種団体、各層から町民ぐるみの学習イベントがある。ここでは、自立を育む青少年部会、潤いと安らぎのあるまちづくり部会、生き生き健康部会、豊かな心を育む文化活動部会、美しいふるさと環境部会、活力あるふるさと産業部会と、6つの分科会を設けての熱心な議論が交わされている。

生涯学習の推進において、地域の人材の活用や郷土教育の場の提供として学校開放をあげている。これは、学校の図書室や特別教室、一般教室の開放という施設の面からだけではなく、学校の教職員の地域活動参加や地域と学校との連携をあげていることである。さらに、郷土の学習資源を生かした学習機会の提供を生涯学習施策のなかで展開していることである。

学校教育の充実として、基礎・基本の確実な定着と特色ある学校づくりとして、郷土素材の教材化や多様な体験活動をとおした喜界島らしい教育の推進、総合的学習の時間の充実と研究推進などをあげている。

特色ある学校づくりでは、地域に開かれた学校経営や教育内容・方法の多様化・弾力の施策をだしている。地域に開かれた学校経営では、各学校の教育課題の的確な把握、課題解決をめざすということから「一校一改善」「一事徹底」「確かめ見届け」の推進を強調している。

国際的視野に立ち、郷土に根ざした特色ある教育をすすめていくために、児童生徒の実態や地域住民の意見を踏まえ、具体的に教育目標を設定していくことの必要性をあげている。

特色ある教育の施策として、喜界町では、地域の文化と産業からの郷土教育、地域に根ざした喜界町らしさを強調しているのである。これは、町づくりは人づくりという基本理念から、ふるさとと自らが誇りをもてる教育実践の推進を目標にしている。そして、子どもの生きた現実の姿を大切にしながら、主体的な生き方からの進路選択や生き甲斐をもてる生涯学習を積極的に展開している。

第2節 「3・4年の社会科のわたしたちの喜界町」の特徴ある副読本

小学校の3年生と4年生が使う社会科の副読本は、各小学校の社会科の研究担当する教諭によって、喜界町教育委員会の責任のもとに編集されたものである。この副読本は、「身近な校区や喜界町を中心に、人びとのくらしをよくするために、どんな工夫や努力がされているか学習」するため

に作られたものである。子ども達が勉強しやすいようにと「たくさんの写真や資料をのせているが、子ども達が「自分で考え、友だちと話し合い、調べたりして喜界町や鹿兒島のようすを、くわしく知るために」として編集されたものである。郷土を社会科という教科の側面から認識していこうとする副読本である。

小学校の3年生と4年生の社会科の教科に、身近な郷土の地理や暮らしを子ども達が歩いて、調べ学習をしていくための副読本になっている。そして、「喜界町をもっと健康で明るく、住みよい町にするためにはどうすればよいかを考えるように」と、明確に喜界町の将来の発展を身近な暮らしのなかから子ども達に描いてもらうために書かれたものである。

副読本のスタイルが子ども達に歩いて体を動かして、目でみてわかるような観察や大人から話を聞いたりして、子ども達自身の好奇心をもてるように工夫されている。地域の課題発見や地域課題の設定を社会科の副読本として、積極的に展開されている。

調べ学習や地域問題に対する問いかけが数多く用いられていることは、子ども達に知的な探検心を利用しようとする教育的な工夫がみられるものである。

また、子ども達自身で話し合うことをして、目でみて観察したこと、調べたことを絵地図にしてまとめている。

これは、子ども達が自分一人で問題を認識していくという個人中心主義的な認識ではなく、友達仲間と共に考えながら学び合っていくという共生的な社会科の知的認識をしているものであり、社会科を子ども達の小さなグループをつくりながらの社会的な発達を伴って学習をしていこうとする姿勢が副読本にあらわれているのである。

教師は、子ども達に地域の課題発見や課題設定ができるように、航空写真や集落の写真、グラフ化したわかりやすい資料、町の仕事の写真など豊富な資料を3年生や4年生の子どもでもわかるように工夫して提供している。そして、子ども達に観察学習や調べ学習など実際に歩いて行動して体験的に認識して、地域の課題を発見させながら問

題を問いかける授業方法のための副読本をつくりあげている。

総合的学習の学力をどう育てるかということで高階玲治は、「これまでの学校教育において最も欠けていた能力の一つが、課題発見や課題設定の能力だったからである。多くの子どもは、問題は与えられたもの、答えはみつからもの、と考えてきた。授業そのものが、教師問題を与え、子どもはひたすらそれを解くという形態で続いてきた。しかし、世の中はそうではない。何が問題かきわめて難しい状況もあれば、解答がでないで立ち往生する場合もある。大人はいつも解決不可能な問題に遭遇している。学校教育だけは、教師が問題を把握し、それを小見出しに子どもに与えて解けるように導いていく。そこから「問うことを忘れた」子どもが大量に出現する」⁽⁴⁾

副読本の喜界町の人びとのくらしでは、「喜界町には、どんなしごとがあるか、自分たちの校区と比べてみよう。」住む土地がちがうと、しごとにどんなちがいがいるのでしょうか」と、問いかけている。

そして、「喜界町では農業をする人がたくさんいます。なかでもさとうきびがさかんです。昔は田で米をつくる人もいたのです」として、さとうきびづくりがさかんになったのでしょうかと、子どもに問いかけているのである。さらに、さとうきびのほかに、すいかやメロン、マンゴー、トマト、花などの農家をあげている。

喜界町の農作物の中心は、さとうきびということから、さとうきび作りの様子をくわしく副読本では描く。製糖工場や荒木集落などの自家製の手作りの製糖工場の紹介をしている。さとうきびの植え付けの時期、とりいれの時期などの農事のこよみを提示しながら「さとうきびを作っている人びとはどのようなふうをしながら、さとうきびを育てているのか調べてみましょう」と問いかける。さらに、副読本では、メロン作りの様子、きく作りの様子について描いている。

工場で働く人々として、製糖工場の仕事が副読本で紹介されている。工場では70名ほど働いていること。農家でとれたさとうきびが工場までどのように運ばれていくかということの調べ学習が問

題提起されている。この副読本では、課題発見や課題設定の能力形成に意識的にとりこんでいるのである。

道路ができることによって、さとうきびが工場まで運ばれていくうえで、大変に便利になったことが副読本では、のべられている。喜界島の特徴としての集落ごとの手作りの工場と、大きな製糖工場との違いなども子ども達に調べ学習としての問題提起がされていくことも大切なことである。

この問題については、副読本で全く語られていないのが残念である。さとうきびがどうやってぶんみつとうになるか調べてみよう副読本は、問題提起する。喜界町での黒糖焼酎についても、多くの人々に喜ばれているという記述だけではなく、付加価値を高めている農産物の加工商品として、積極的に位置づけていく記述が必要である。

喜界町の産業を振興していくうえでの基本的な視点をもてる副読本の作成が求められているのである。子ども達に地域発展の夢をもたせていくように、現実の地域産業振興の新たな動きに伴う人々の努力や工夫の様子を記述しながら教師が未来思想的に地域の課題発見や課題設定から問題解決能力の形成のための調べ学習の問題提起をどれだけ与えているのかということが最も大切なことである。

総合的学習の学力をどう育てるかを提唱する高階玲治は社会科教育のなかで問題解決能力の形成の重要性について、次のように指摘する。

「社会科は従来から問題解決能力の形成が重視されてきた。それはこれから変わらぬ社会科の基本である。ただ、単元構成で学ぶ社会科の授業は時間的な余裕がないままに問題解決を十分こなせないできた。そのため、教科書中心の形式知としての知識獲得で終わっている場合が多かった。それに対して総合的学習では地域へ出かける機会が多くなることから、地域での体験的な学びを広げることが可能になっている。実際の学習活動の場で、ある時は見学し、ある時は調査し、というように本来社会科で実施すべき学習活動を行えるようになるのである。そのため教科書中心の学びとは全く違った学習活動が展開される。それは実際の生活に生かせる体得的な知の獲得であって、必

要な資料を収集したり、調べたことを効果的に表現したりするなど学習スキルとして徐々に身に付けていくのである」。⁶⁾

この意味からも最近の喜界島農業の特徴として、ゴマの生産が伝統的につくられてきたのが、健康ブームにのって、作付面積が急速に拡大したことも特記することである。ゴマ生産は、喜界町農業所得の新たな大きな位置を占めるようになっていく。また、肉用生産牛飼育など、喜界町の台地の荒れ地を開墾した新たな中核農家などの記述もないことは残念である。

副読本の作成においては、小学校の教諭だけではなく、農業や地域産業振興に関連する関係者との郷土読本の教材の開発がされることが求められているのである。

この際に、未来思想的に問題設定して、喜界町で育ったことに対する誇りや喜界町で生きていくうえで、子ども達に将来への夢をもたせていく方法が基本的視点として必要なことである。この副読本が5年生への社会科の産業の授業にどのように発展していくのか。また、小学校での歴史教育や国際理解教育などとの知識とどのように関係していくのかという視点が必要である。

社会科の領域や単元が、それぞれ細切りのなまとまりのないものにバラバラに切り離されている状況であれば、本来、小学校の発達段階における生活や体験からの社会科の認識を行っていく段階においては、学力の定着が十分についていくものにはならない。教えられても直ぐに忘れてしまう試験のための学力にすぎなくなってしまう。

さらに、副読本での地域教材が理科や国語などの他の教科との関係でどのように融合していくのか。これらの融合との関係で総合的な学習の時間における体験的が、教科での体験的な認識のなかで位置づけられ、それが、子どもの発達段階に即した課題発見や課題設定の能力のための理性的な抽象的認識へと発展していく基盤になっていくのである。

第3節 喜界町の各小学校の特色ある教育実践

喜界町の各小学校の特色ある教育実践として、

まずあげなければならないことは、地域の生活に根ざしての郷土教育の実践である。喜界町の役場のある中心市街地の校区である湾小学校では、郷土の伝統や文化、風土を生かした全人教育を実践している。

上嘉鉄小学校では、地域の教育力を生かした郷土教育の推進として、さとうきび栽培、黒糖づくり、郷土の文化継承として、三味線、島唄、八月踊り、ソーバン踊りなどを実施している。

地域の文化伝統は総合的な学習の時間で取り組み、校区の住民にその成果を披露している。また、高齢者との触れ合い活動として昔の遊びやゲートボールを行っている。

音楽では郷土素材の活用として、三味線や太鼓の指導を行っている。道徳教育では、総合的な単元の推進として、教科や総合的な学習の時間を利用しての郷土の誇りなどの教育実践を展開している。月2回に保護者からの子どもの様子を書いたものを提出してもらい、学校と家庭・地域との連携による道徳教育の実践をしている。

総合単元学習のなかで道徳を位置づけたことは、郷土の誇りなどの道徳的価値意識の形成に力点を置いている。それは、体験的な活動をとおして内面化されていくものであるということから、子どもの生活の全体をとらえていくことが必要である。つまり、家庭や地域での体験活動も重視しての学校での道徳教育を考えているのである。

上嘉鉄校区は、最も幅の広い湾頭原と呼ばれる700haの耕地をもっているところで、さとうきびのさかんな地域である。

しかし、農業の高齢化が進んでいる。世帯は464戸で人口1006人であるが、小学校の児童数は平成18年5月現在で、59名で来年度の予想児童数は、44名ということで、児童数の急激な減少のみられる校区である。

荒木小学校の校区は、地域に根ざした教育活動の推進として、伝統文化の継承として8月踊りや棒踊りの実践、校区の歴史や文化、産業や自然遺産の再点検ということでマップづくり運動を展開し、教育活動としてさとうきびやゴマの栽培、落花生の総合単元学習などのとりくみをなど地域の暮らしや文化の教育課題を積極的にとりあげてい

る学校である。

ここでは、学校教育活動に地域住民が積極的に参加していることが特徴である。この校区の世帯は、280世帯、人口663人である。児童数は、平成18年度5月現在で43名ということであり、来年度も児童数の減少のない校区である。農村地域の小学校で、児童数の減少のない地域としては特記すべきところである。

早町小学校は、児童数38名の小学校である。357世帯で人口754人からすると荒木校区からすると世帯も人口も多いが児童数は荒木校区よりも少なくなっているのである。畑地帯総合土地改良事業により耕地のほとんどは区画整理がされ、機械化一貫体系のさとうきび生産が実施され、ほとんどの農家はさとうきび生産者になっている地域である。

昭和31年の合併時以前は小学校のある土地は、旧村の役場のある地域で、港町としても栄えたところである。現在でもわずかながら小学校の近くに市街地が形成されている。平成5年の10年前までは児童数が71名あった小学校である。この地域は児童数が急激に減少してきたが、地域に根ざした教育活動として、総合的な学習の時間を活用して、地域の伝統文化や産業などの調べ学習を展開している。さらに、高齢者の交流活動の推進のなかで方言学習をとりいれている。

小野津小学校は、212戸、人口421人であるが児童数は13人と小規模の学校である。浜集落と農業集落からなる校区で、農業集落では78戸のうち35戸のさとうきび農家であるが大規模のさとうきび農家が形成されており、35戸の農家だけで喜界町全体の1割の生産高を占めている。

この集落の児童数は4人でP T A戸数は3戸である。大規模化の進む農業集落では極めて児童数が少なくなっているのである。

総合的な学習の時間を利用して、さとうきびに学ぶということで産業体験学習が行われている。そして、海の囲まれた自然学習として追い込み漁業の体験学習を行っている。これらの体験学習をとおして、ふるさとに誇りをもてる学習を実践しているのである。

志戸桶小学校は、平成18年5月現在56名の児童

数をもつ。この校区は、380世帯、人口863人である。この地域は畜産、花卉、蔬菜などさとうきび依存の喜界農業から複合的な農業を模索している新しい農業生産意欲をもつ地域である。小学校では地域素材を生かした郷土教育として、地域の指導者を講師に招いて、黒砂糖づくりを総合的な学習の時間に実践している。

また、民話の発表や民謡に親しむ活動を行っている。学校行事として学習文化祭をしているが、ここでは、子どもの作品の展示ばかりではなく、地域のお年寄りや女性たちの作品も展示し、さらに、8月おどりなども学習文化祭で披露して、地域の人と共に踊っている。志戸桶小学校は、地域の指導者を積極的に学校教育のなかに招いて教育実践をしているのが特徴である。

阿伝小学校は児童数11名の小規模であるが、世帯161戸、人口283人である。ここでは、体験活動を通したふるさと意識をたかめる活動として、さとうきびづくりや島唄や三味線活動を行っている。地域のことを知ろうということで、総合的な学習の時間を利用して、大島紬の仕事の見学をしている。そして、人から話を聞くことやさとうきびについての学習を行っている。さとうきびばかりではなく、メロン、菊などを導入している農家もあるが、校区の老齢化は深刻な状況である。

坂嶺小学校は、児童数12名であるが、校区の世帯数246戸、人口477人である。7つの集落から校区から構成されている。ここでも島唄や三味線の活動を行い、さとうきび、トマト、稲、ごま、タイモの栽培活動の実践をしている。滝川小学校は、13名の小規模の学校である。喜界町の台地の水の豊かな地域にある小学校である。139戸、255人の人口の校区である。

アサギマダラの南下、北上の実態調査を調べるために全校児童でマーキングにとりくんでいる。また、昆虫や植物等に学習の対象を広げる活動を展開している。地域の教材を自然教育に力を入れているのである。

喜界町の各小学校では総合的な学習の時間を利用しての地域にある農業や文化行事などの体験的、伝統的な唄や踊りの修得に力を入れている。

喜界町全体が高齢化ということで過疎化に悩

み、地域の経済的な発展が大きな地域課題になっているが、学校教育サイドからは、自分のふるさとに誇りをもてる教育として力を入れているのである。地域に誇りをもたせる教育において、地域の生活を直視していくことが大切であり、各小学校でも特色ある教育活動のなかで調べ学習ということで、体験的な活動を重視している。

このなかで、総合的な学習の時間が活用され、また、総合的な学習の時間ばかりではなく、教科と結びつけての総合単元学習の試みを荒木小学校ははじめみられているのである。地域の生活課題をみつめ、子ども達に生まれ育った地域に誇りをもたせていく教育実践を進めていくうえで、教科の枠組み内だけで、それぞれの単元ごとに関連性のないバラバラの教育実践では、子ども達は、生きた誇りをもつことはできない。

生活の学習にかかわる課題を教えていけば、教科の枠組みを超えていくことは必然的なものである。クロスカリキュラムの理論と方法を生活との関連で提唱する野上智行は次のようにのべる。

「学習の生活に係わる課題の追求が教科の枠組みを超えることは、先に取り上げた「地球環境問題」の議論に関わらず、これまでの教育体験からも自明のことである。「教科をクロスする授業」の特徴は、こういった課題をひとつの枠組みに閉じこめることをせず、関連するすべての教科において、それぞれの教科の固有のアプローチ法によって追求することにある。このことは、結果として、学校カリキュラム構造の変化を求め、教科の構成と内容の変革を求め、学校と地域（社会）とのかかわりの変化を要請することになるであろう。学習者の生活に身近な課題であれば、どのような課題でも教科をクロスする学習を引き起こすというのが前提である」⁽⁶⁾

地域の生活や生産課題を教材として、とりあげ、学力の定着と結びつけていくなれば、クロスカリキュラムや総合単元学習が必然化していくのである。

地域に根ざした教育実践が、学力と関係なく、子どもたちの体験的活動に終わるならば、総合単元学習やクロスカリキュラムの問題につながっていかない。総合的な学習の時間の導入によって、

各学校でとりくまれている地域での体験活動が、総合単元の学習に発展していかないことは、それらが、学力問題と切り離されているからである。

従前の学力問題を生きる力という生活との関連や現代的な課題との関係で、学力の定着化、生きていくための学力として、体験的学習を重視したのが、総合的な学習の時間の導入の意義であったのである。

第2章 喜界町荒木小学校の地域教育実践の特徴

第1節 荒木地域の特徴

荒木小学校の校区は、世帯数272戸、人口611人の農村であるが、43名の児童数であり、他校区の同じ規模の世帯数と比較すると児童数の減少がない。

平成10年度46名から児童数が一定の数を保っている。喜界町の小学校のなかで児童数の減らない校区となっている。小学校の校区と集落の区会が一致しており、学校の地域連携活動と集落の区会活動が有機的に結合しやすい条件をもっている。

集落の区会では、共有地を住宅対策のために有効利用する対策をとってきた。個人住宅用に300㎡を月600円で貸している。この共有地に36戸が借りて人口の減少の歯止めに必要な役割を果たしている。さらに、教職員住宅用6戸を建築している。教職員住宅には、中学校の教員用にも提供している。

荒木の集落は40haの共有地をもち、住宅施策ばかりではなく、荒れ地を畜産用の倉庫・事務所に利用できるように、荒木地区の農家に貸与している。この共有地への住宅の貸与は、昭和49年から開始されている。この頃から他に出て行った荒木集落の出身者を戻すための住宅施策が集落の智慧としてあみだされていたのである。

荒木集落は、白ゴマの発祥地であるが、多品種の複合経営の農家が多い。喜界町全体で地下ダム建設して、畑地かんがい施設をつくりあげているが、荒木集落は、その対象外地域になっている。

荒木集落はもともと岩が多い畑地であり、田圃もない貧しい地域であった。集落別に個人の手作

りの製糖工場が根強くのこっているのも喜界町の特徴である。その中心になっているのが荒木集落である。黒糖工場は、9工場と平成17年度の地域住民で作成したふるさと探検マップにも特別に強調している。

農業基盤整備には、集落のなかで、様々な意見があり、導入も遅れた。トラクターを導入して農業の省力を行った農家は、自力で客土をして農地の基盤整備をしたほどであった。荒木集落は、岩が多く、トラクターを導入する土地条件にも適していない地域であった。

しかし、農業基盤整備によって、その問題が解消した。この農業基盤整備の事業を集落で進めていくうえで、役員が特別に気がついたことは、役得やゴネ得がないように、情報公開を集落の有線放送で流したことである。集落住民の意志決定が民主的に行われるように、途中経過をガラス張りにした。荒木集落の運営は、集落会の規約を尊重して、運営を行っているのが特徴である。

情報の公開を徹底することによって、みんなで農業基盤のことについて考えるようになり、役員や役場に対する不信もなくなっていき、自分たちの集落は自分たちで考えていこうとするようになり、住民主体の農業基盤整備になっていった。

荒木集落は、もともとの畑作地帯であり、それも条件のよくない岩を含んだ畑地ということから、集落のしほりを強くして、農業経営を行ってきた。個々の農家の自発性と創意工夫によって貧困と闘ってきたという歴史をもっていた。

トップリーダーによって、集落がまとまってきたのではなく、集落の住民がみんなで話し合っただけで地域の振興をしてきたのである。イタバというように、集落のなかで親戚や隣近所による助け合いの労働が伝統的に行われてきたが、しかし、集落全体としての強い拘束性があったわけではない。嫁いでいくときには、持参の畑地をタカとしてもっていく習慣があった。

荒木の集落会は、文化伝承活動、環境整備・環境美化活動、防火・防災、共有地の管理・保全、スポーツ活動、青少年育成活動などを行っているが、夏の盆踊りは、実行委員会方式でとりくみ、若い人が活躍できるように夜店を高校生や若者が

出せるようにしている。また、ビンゴゲームなどをとりいれたりして、青年達が主体的に運営し、集落全体で盆踊りを楽しんでいる。お盆の夏祭りは、若者が帰郷して、ふるさとの友人に会えるのが楽しみの場になっている。

荒木集落会は、総会が最高の決議機関となって毎年の4月に区会総会が開かれている。荒木の集落は、日常的には、代議委員会によって、運営しているのである。また、専門委員会として、環境整備委員会、自主防災組織運営委員会、共有地委員会、農業集落排水事業委員会を別に設けている。

日常的に集会を運営していく代議委員会は、荒木出身町議、荒木出身農業委員、歴代区長、民生委員、各専門部委員長、各種団体長、各組長、農業振興会長、子供育成会長から構成されており、婦人会代表は、副会長の役があてがわれている。

専門委員会の荒木集落共有地委員会は、委員長に集落区長があたり、集落議長、集落書記、集落会計を役員にしている。また、代議委員会の推薦によって、総会によって承認された12名の委員によって構成されている。共有地は集落の過疎を防ぐことを目的とし、原則として営利目的に貸すことはない。

貸地の条件は、荒木出身であること。住宅用に使用し、契約人は居住すること。但し住居と兼用の事務所等については共有地委員会の承認を得ること。借人の資格は、共有地委員会で決定すること。賃借契約には、2名の保証人を必要とし、保証人は連帯責任をもつことにされている。

荒木集落自主防災組織委員会は10名の運営によって構成されているが、その10名は、集落組長、集落婦人会役員、及び地区民生委員をあてがわれている。会長は区長があたっている。副会長は婦人会長である。集落議長、集落書記、集落会計があたっている。この自主防災組織委員会は、集落における災害において人的及び物的被害の発生・拡散を防止する目的の組織であるが、集落の女性も大きな役割を果たしているのである。

地域の伝統文化継承として、荒木伝統文化保存会の指導のもとに、校区内の高校生、中学生、小学生が共に伝統文化の継承のために棒踊りや8月

踊り、島唄などの練習に励んでいる。

棒踊りは大正のはじめごろ種子島の野間集落から伝わってきたものであるが、荒木の棒踊りは動きがはやく、青年団が催すものであった。

荒木集落の8月踊りは、自分たちで唄って踊るといふことで、声のだすところと踊りがなかなかあわない。子ども達は唄と踊りの合わせに苦勞するのである。二人で唄いあわせるのも技である。子ども達が唄って太鼓もたたき、地域の人達が踊るといふことをしている。地域文化祭や各種の地域行事に、高校生、中学生、小学生と活躍するのである。

この荒木集落の伝統文化の継承には、集落の伝統文化保存会や老人クラブなどの全面協力によって、子ども達への伝承文化における技の継承がされているのである。地域の大人達と子ども達との交流として、老人クラブと小学生とのグランドゴルフの大会があり、また、大人と子ども達がともにプレイするバレーボルの行事がある。

荒木集落では、子どもが地域の宝としている。伝統文化の継承を子ども達に集落ぐるみで伝え、青年たちが活躍できる盆踊りの行事を企画している。そして、子どもを集落で見守っていく。このための様々な行事が行われている。それらが、地域行事として単独におこなわれるのではなく、学校行事との連携をもちながら展開しているのが特徴である。

第2節 地域教材開発と地域再発見のための住民ぐるみのマップづくり

自分たちの校区を見直そうということで、集落内のふるさと探検を子どもから大人まで集落ぐるみで荒木校区は実施している。詳細な住宅や遺跡の入った地図をみながらコースを歩き、自分の住む地域の良いところ、悪いところを点検している。これは、今後の地域づくりや教育に生かしていこうとすることが目的である。

参加者は、気がついたことを個々が地図に書き込み、コース歩きの終了後に、荒木小学校に集まって、みんなで探検の成果のマップをつくりあげた。この活動は、平成17年度の大島支庁喜界事

務所土地改良課の事業補助を受けて実施している。

事業にあたって、集落地図や探検マップ作成にサポートを受けている。この成果は、荒木小学校の玄関ホールの近くの壁に、ふるさと探検と夢マップとして、荒木地区の点検項目が地図に塗られて披露されている。

荒木小学校の児童たちが探検隊として積極的に参加し、実際に歩いて大人たちと一緒に見てまわることによって、自分たちの集落の良い点、悪い点を子ども自身で考えたことは大きな教育的成果である。

そして、さらに、大きなことは、大人たちと一緒に考えたふるさとの点検の確認を地図としてまとめたことであり、地域を良くしていくための学習の課題をも見つめたことである。

このふるさと探検活動は、荒木サマガーと呼んで実施した。1960年代まで荒木地区では、トビウオ漁などの漁師の集団があり、サマガーは、トビウオの方言である。サマガーの漁は、集団の組をつくり、親方を中心に結束力が強く、地域の行事にも大きな力をもって、積極的に参加していたことから、ふるさと探検活動が荒木集落の地域興しの結束力ということにつけたものである。

現在でも年輩者のなかでは、昔の荒木の漁業について語る。子どものときでも兄弟でロープを編んだりして手伝うことが多かったのである。

集落内を点検するなかで、生産日本一のしろゴマが集落内のあちこちで干されていることを目に焼きつける。あらためて伝統的につくられてきたしろゴマについて再認識する。ゴマが路地に干してある風景がすばらしく感じたという参加者の意見である。

石垣にゴマが干してあるのも美しい風景であったと参加者の多くは語る。集落内のあちこちに作られている貯蔵庫の役割をしている高倉が10ヶ所、現在でも伝統的な貯蔵法が荒木集落で生きている。昔ながら高倉が残っているが、説明書をつけたらどうかと意見を述べる。

製糖工場が集落内に9ヶ所のあることに、昔ながらの伝統的な手作りの黒糖づくりを大切にしている荒木の集落の人々の伝統を大切にする意識を

確認する。特別に黒糖工場マップができないか。工場直売か見学ができないかという意見が参加者からでている。

町指定の文化財であるウリハーという横坑式に井戸を掘り下げていく伝統工法の遺跡が荒木の個人住宅内で大切に管理保存されている。井戸をまっすぐにたてに掘っていく以前の工法であるとして、井戸を掘っていく歴史の遺跡としても貴重なものである認識をする。

参加者は、個人管理に任せている状況に対して、負担が大きいのと思うので、みんなで協力して手伝うことができないだろうかという意見を述べる。具体的な解決策として、現在行っている美化清掃の時にここも一緒に清掃できるように所有者の方と話し合うということにふるさと探検の結論がなったのである。

昔からの魔よけとしてT字路に掘られた「石敢當」、荒木集落では、自然石彫りの昔から伝わるものが残されている。さらに、昔の馬の放牧地であるメン山がある。

ここに馬頭観音や神木があったが、その由来の案内板などがほしいという参加者の意見である。馬の放牧地などの管理運営は荒木集落としてどのように行われていたのか。荒木集落の人々の伝統的な生産と結びついた地域の共同性の文化とも絡めて、考えていく課題でもある。

以上のように参加者は荒木集落の文化財や地域産業における文化性などを学びながら、荒木集落の地域づくりについての具体的な解決策なども提案している。このふるさと探検のマップづくりをどう具体的に学校教育行事に生かしていくのか、地域の教材として授業にいかしていくのかが今後の課題であるが、子どもたちは自分たちが参加したふるさと探検の成果をまとめたマップを毎日、玄関ホールの壁でみているのである。

第3節 荒木小学校における総合単元学習の実践

荒木小学校では、苗植えから黒糖作りの一貫した体験活動を総合的学習の時間で実施している。黒糖を使ったお菓子づくりなども地域の人やPT

Aの全面的な協力で推進している。

荒木小学校では、平成18年度から総合単元クロスカリキュラムの実践をはじめている。この実践は、生命と生命の関わり―落花生との出会いをとおして一という単元名で20時間の年間をとおしての学習を設定している。

総合的な学習の時間を利用して、農業に対する理解と食に対する理解を深めさせるということで、具体的に落花生の栽培活動や収穫を通して学ぶのである。落花生の成長過程にみられる葉っぱのつくりや働き、受粉や結実の様子を観察させ、恵まれない土地においてもたくましく成長していく落下生について学ぶ。収穫した落花生をいろいろと調理に生かし、食の楽しさと命の関わりについて学ぶという教育目標をたてている。

荒木小学校では、期待される教育的価値として、次のように問題提起している。

1. 自然を大切にす心、体験を通して得られる感動等、机上の学習から得られない効果がある。
2. 労働の価値や食べ物を作る人への感謝の気持ちが醸成される。
3. 体験学習を通じて、子どもたちへの自主的な気持ちを育て、問題解決の力がつく。
4. 地域の人達と交流する機会が広がる。
5. 農産物や農業・農村への興味がわき、理解が広がる。
6. 食べ物や食生活等に役立つ知識が得られる。
7. 子どもたちに精神的にゆとりがある学習ができる。
8. 専門的に指導していただけるので理解が深まる。失敗が少ない。

以上、8点にわたっての期待される教育効果をあげている。期待される教育効果からは、教育の本質に関わる問題提起が打ち出されている。体験をとおして得られる感動のなかから自然についての理解という学力の定着の見方がある。

さらに、体験学習をとおしての子どもの問題解決能力の学力も求められる。地域の人々と交流して地域教材を使っていく教育方法の効果がみられる。そして、総合的に問題をみつめ、その教育的な工夫を地域との関係で実践することによって、

専門性が深まり、子どもの興味関心が高まり、子ども自身が自主的になり、余裕もてる授業が展開できることなどの積極的な教育効果が期待されるのである。

しかしながら、年間をとおしての20時間という時間設定が極めて限られているなかで、総合単元学習の本来的に期待される教育効果が発揮されていくのかという大きな問題も残る。十分に時間設定の関係で検討していく課題がある。

全20時間は、1、ふれる段階、2、つかむ・たてる段階、3、調べる段階、4、まとめる・いかす段階と4つの段階にわけて授業の展開を考えている。

ふれる段階は、今までの学校教育の栽培活動の経験をもとに楽しさや努力を想起させ、落下生の基本知識を与えて、興味・関心の学習意欲を高めていく。

つかむ・たてる段階では、基本的な栽培活動をもとにグループ課題、個人課題を設定していく。土の種類、耕地面積、肥料、栽培方法、手入れを栽培についての5つの問題設定をする。

調べる段階では、子どもが十分に観察できるように、畑における観察と、教室のなかで毎日目に見えるようなプランター観察と両面の方法をとった。畑は1週間に一度の観察で顕著な変化を記録すること。毎日の観察は、教室のなかで記録用紙を準備して、理科学習や国語の学習との関連させるように、観察の視点やまとめ方の工夫の指導をしている。

まとめる・いかす段階では、落花生を食にしていることで、楽しい食の体験、食べ物を大切にする心情を育む指導を展開することである。落花生を使ってどのような調理ができるのか。地域の食の推進委員を学校教育での地域の先生として招請し、調理の方法や実際の調理を体験させていくことを求めている。

落花生の秘密を発見する学習課題として、学校の教育指導案では次のようにまとめている。

「1、とてもきれいな花をつけていく。2、葉っぱいに水を貯める。3、自家受粉をする。4、子房柄というところが成長して実をつける。豆類は地上にできるものが多いが、落花生の秘密

を知る。5, 土のなかを掃除する。6, 栄養価が高い。7, いろいろな調理に工夫できる。8, 作物を育てるには、十分な栄養が大切であり、小さな容器に植えるだけでは養分が足りず実が小さい。9, 堆肥が種を大きくし、新しいたくさんの実をつくる。その実を食べてわたしたちは成長する。排泄物を使って堆肥を作る。まるで、生き物の世界は生命が上手に回転していくようだ。植物を大切に育てることは、自分たちを育てていくことにもつながる。……」。

指導案では、以上のような学習課題に期待をかけている。これらの学習課題が成果をあげていくには、総合的な学習時間における限られた実践時間ではなく、総合単元学習として、他の総合的な学習時間の体験的な学習や社会科、理科、国語、道徳などの各教科との関係をもたせていくことが必要になっていくのである。

総合的な学習の時間における体験的な活動を軸にして、社会や理科などの観察や調べ学習が可能な教科と関連づけながら、それらが、地域教材として結びつくことによって、また、地域の人々の学校教育への協力が可能になることによって、総合的な学習の時間から発展した総合単元学習の効果がより強まっていくのである。

注

- (1) 神田 嘉延「地域連携型の中高一貫教育と地域の自立発展－鹿児島県喜界島の実践を中心に－鹿児島大学生涯学習教育研究センターの年報論文第3号。
- (2) 山口大学教育学部附属中学校研究紀要第42号(1988) 参照
- (3) 今谷順重偏「横断的・総合的な学習とクロスカリキュラム」黎明書房1997年、2頁
- (4) 高階玲治「総合的な学習の学力をどう育てるか」明治図書2001年87頁
- (5) 高階玲治偏「社会科から発展する総合的な学習の学力」明治図書2001年15頁～16頁
- (6) 野上智行編「クロスカリキュラム理論と方法」明治図書1996年28頁

